



Title	根岸勉治氏「栽植企業方式論」に就いて
Author(s)	矢島, 武
Description	紹介
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 8, 316-320
Issue Date	1940-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10690
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_p316-320.pdf



保の必要を主張した。もとより人口増加の源泉は農村にあり、農業は擴張の餘地なく、過剰人口は都市に引受けて貰ふ外はなかつた。それだけ都市の工業が發達してくれたことは有難いことであつた。が東畑氏の云ふ「わが重工業は向後益々多くの勞働力に雇傭市場を見出すだらう。」との意見に私は無條件の賛意を表すことは出来ない。現在の重工業の發展は事變の爲めである。これが何時逆轉しないと限るか。過去に於て不景氣時代には失職失業者が多く出其の歸農が獎勵されはしなかつたか、「支那の苦力の内地輸入の形で重工業的發展を齎さざるを得ないやうなことにでもなるならば其處には十分に反省さるべきものがなくてはならない」と云はれるが、農業者を炭坑に送りこむよりは苦力を炭坑に入れるのがよくはあるまいか。轉職苦は農民に多く苦力に少いであらう。農業界にすら、少くも現在の耕種經營法に即する限り勞力不足の緩和法として支那の苦力や朝鮮の小作人を入れんとの要求があり得るのである。支那の苦力や朝鮮の小作人と競争させる様のが行はれて居る今日の矛盾を如何に見るかである。

(昭和十五年二月)

根岸勉治氏「栽植企業方式論」に就いて

矢 島 武

一
植民の形式を假に北方型と南方型とに分けるならば本書は正に南方型植民の研究である。著者はつとに臺北の大學にあつて南方型植民の研究に専念せられ、其の結晶が本書となつて現はれた次第である。我國の南方への發展がますます重大性を加へんとしつゝある折柄、本書の出現は極めて有意義なものと云はねばならぬ。

二

扱て、本書は全篇十三章に分れ、五六五頁の可成の大著である。第六章迄が總論、第七章以下が各論に當るものと考へられる。即ち第七章以下は砂糖、茶、珈琲、麻、護謨、棉等の各作物別に就き其の栽植經營方式の實態を詳細に叙述せるに反し、第一章乃至第六章は植民現象論、栽植企業經營概念並びに其の特殊性、該企業方式と農作物の性格との關聯、栽植企業に於け

る民族と階級の問題、栽植企業方式の原料獲得形態、栽植企業に於ける農業段階並びに企業循環性等所謂總論的問題を分析して居るのである。私は本文ではこの總論的部分に關する著者の研究の大體を傳へ、之れに對する感想或は出來得べくんば短評の如きものを加へたいと思ふのである。

三

第一章は植民現象、植民地形態及び熱帯植民地と題し、著者は一應教科書的な敘述を展開して居られる。即ち植民現象の樞軸として資本・商品及び人口の移動を捉へ、之れが移動の形態は植民國並びに植民地の産業發達段階の異なるに從つて異なることを圖式的に説明し、更に植民地資本主義化の過程も植民國と植民地との發展段階の差異に依存することを指摘される。次に植民地の各種のメルクマールによる分類を掲げられ、最後に熱帯植民地の重要性に論及して居られる。即ち熱帯植民地は面積に於て全植民地面積の七八・四%、人口に於て全植民地人口の九三・三%、産出する主要食用作物に於て全植民地産額の約八三%なること等があげられる。而して工業原料就中棉、生護謨、マニラ麻、黃麻、コブラ、其他製藥原料に不足する我國に於て熱帯植民地は益々重要性を加へ來り、栽植企業の

研究も重要となると斷じて居られる。

以上之れを見るに後章に於ても一般的に然るが各節間の有機的聯關が必ずしも明白でないことが感ぜられる。從つて最後の結論と始めの植民現象を規定する植民國、植民地産業發達段階關係論との結び付きが明瞭に理解されない嫌がある。其處で例へば我國が利子國化又は重工業國化すれば熱帯の供給する輕工業原料の比重は減少するのではないかと云ふ疑も生じないわけではない。然し經濟發達段階關係論は極めて重要な中心的理論とも云ふべきものであつて、之れは植民現象を統一的に説明し、植民學を一つの理論體系に組立てる鍵ではなからうかと私は臆測するものである。この意味で著者がかゝる基本的理論を頭初にとり上げたことは極めて有意義なことゝ考へた次第である。私も嘗て *Die Verschiebung der Weltwirtschaft 1934* なる小報文をものし著者の驥尾に從つたことがあるが、この章は兎も角出發點に於て極めて重要な構想を含むことを特筆したい。

第二章に於て著者は栽植企業經營の概念と特殊性に就て論歩を進められる。而して先づ栽植企業形式の發生と歐人の熱帯移住困難性とに密切な關係あることを指摘し、我邦人の熱帯移住可能性に鑑み、我邦人の南

方經營に關する限り栽植企業形式にも大なる變化を生ずべきことを豫想される。第二に栽植企業經營概念に關する諸學者の説を紹介し、結局「熱帯栽植企業とは資本主義的原理に基き世界市場目的を以て資本主義國が自國の資本、技術及び經營能力を以て熱帯植民地に於て中央集權的管理下に原住民者或は輸入勞働者を組織的に使用し、開拓、栽植、蒐集し以て所謂植民地物産又は貿易的作物を大農經營組織にて生産するを云ふ。」と規定して居られる。第三に栽植企業の發達を植民史的に概觀し、將來「資本家的栽植企業も國家的見地よりしても社會性を加味し、國策線に沿ふべき運命にある。」ことを注意して居られる。第四に栽植企業成立の技術的基礎として、永年性作物を對象とすること、農産物加工度の高き爲めに多くの資本を要すること、勞働需要が平均的であること等をあげ、第五に栽植企業經營の特殊性として、單一耕作なること、土地氣候のみならず交通關係によつて左右される特殊なる企業立地をもつこと、移動性の大なること等を指摘して居られる。尤も以上は第二章の單なる骨組に過ぎないものであつて、實際には著者の筆鋒は更に多岐に亘つて居て把握に困難を感じる點も尠からずある。

扱て著者がこゝに於て「栽植企業」と云ふ特殊な制

度の特殊性を問題にすることは、研究の正攻法とも云ふべきものであつて、まことに妥當な態度と云はねばならぬ。學問の研究は要するに特殊性が如何に一般性 || 必然性であるかを明かにすることにあるとすれば、特殊性を明かにすることはもとより研究の第一段階と云ふべきである。然しながら著者が栽植企業經營の特殊性を檢出するための標準となるメルクマールがさ迄系統的、順序的でないこと云ふことが、檢出された特殊性の意義を甚だ不明確ならしめて居ることは遺憾である。従つて日本が南方經營する場合に持つ特殊因子、「移住可能性」が栽植企業形式の上に如何なる作用を及ぼすかと云ふ問題を解く手掛りも中々つき兼ねると云つた次第である。

次に第三章は第二章の特論とも云ふべきものであつて、こゝに於て著者は熱帯農業經營の對蹠的二形態たる栽植經營及び農民式經營 || 小農經營と農作物性格との關聯性を問題にされる。之れは我國の南方經營に關し極めて重要な點である。扱て著者は、この關聯性は作物の種類により多少異なるは勿論であるが、大體に於て農作物の性質上、巨大資本の投下を必要とし、之れによつて生産性を高め且價格變動に對する抵抗力を強めることが出来るから栽植經營が一般に優越性を示し

而も其の經營は巨大化、集中化する傾向のあることを指摘される。而して植民地土着經濟は次第に分解し農民主式經營を營む土着民は何等かの形で栽植經營に参加することとなるわけである。従つて栽植企業は、資本家或は企業家對勞働者、白人對土民と云ふ「民族と階級の二面性」を包藏することになる。即ち、著者は次いで第四章に於てこの問題を取上げて居られる。先づ植民者のもつ資本、技術、經營能力が如何なる手段、如何なる立地をとりつゝ植民地に浸透して行くか、他方、栽植企業の勞働は如何なる形態の下に賄れて行くかを叙述し、かくて一つの組織にまとめ上げられた二民族にして同時に二階級である白人と土人とが結局上下の關係を保ちつゝ一經營内に位置することを示される。こゝに於て植民政策上栽植企業内に農業段階があるかどうか、あるとすれば勞働者は如何なる上昇の仕方をするか、當然重大な問題になるわけである。之れを著者は第六章で論及されることになるのであるが、其の先に著者は第五章として「栽植企業方式と原料獲得形態」との關係に觸れて居られる。抑々栽植企業に於ける原料獲得の形態は栽植企業發達の段階によつて異なるは當然であるが、著者は大體商業資本支配型から産業資本支配型へと移行することを述べ、且、原料獲

得形態は (1)、自營型雇傭式 (2)、自營型請負式 (3)、買收型小作式 (4)、買收型自作式とに分けることが出来ることとされるが、栽植企業方式の變化と原料獲得形態の變化との内的關聯が必ずしも明確に説示されて居ない憾がある。擬て第六章の「栽植企業の社會段階性と企業循環性」では前述の農業段階の現存を指摘されて居られるが、其の叙述を檢するに段階上昇の限度は比較的小さく、且横轉的上昇即ち、主として農業界からの離脱と云ふ傾向をとることが知られる。抑々植民地には大體に於て農業段階の存することは、植民地の動的な社會經濟機構より理解し得るところであるが、然らば具體的に日本移民が栽植企業の農業勞働者となつた場合、之れが農業段階を上昇して獨立農となり得る可能性ありやと云ふ重要な問題に關してはこの章の與へるところだけでは、吾々をして亡羊の歎を發せしむる憾がある。

以上之れを要するに、(1)、理論的には論究の仕方は必ずしも系統的に非ざること、(2)、政策的には我國の南方經營方式に對する具體的見透しを必ずしも與へて居らざることが、遺憾に感ぜられるのである。然し著者十數年の研鑽の結果はこゝに集積され、極めて有益貴重なる資料並びに示唆を隨處に發見し得ることは云

ふ迄もない。殊にかゝる重大な問題を我國に於て専門的に取扱つた類書は筆者未だ寡聞にして知らないのであつて、私は著者のこの先驅的業績はこの意味に於ても高く評價されねばならぬと考へるものである。

(根岸勉治、「栽植企業方式論」叢文閣、價五圓)

オプライエン著

松田武雄譯

「農業經濟學」

川村 琢

「農業經濟學は、農業上の價格に關する學問」である本書はかゝる見地から第一章一般農產物價格問題、第二章個別農產物價格問題、第三章國家と農業とに分つて農業を論じてゐる。

第一章に於て著者は云ふ、農產物價格の變動は一般物價の變動と密接に對應しこの變動の主なる原因は貨幣の購買力の變動―流通貨幣數量の變化―であると。貨幣の側面はこゝでは論ぜらるべき範圍外とせられる従つて著者にとつては價格の變動は外部的に與へられたものとして、この變動が農業に及ぼす影響を問題と

する。農產物の價格の變動の影響は他の生產物に比して激烈であり、これは第一に供給の非弾力性、第二に生產過程の期間、第三に農產物の價格變動と他の價格變動との間の時差の存在にある。

供給の非弾力性は自然的原因、生産者間の非組織的狀態、市場への距離の大なることによるが、價格の變動に應じて生産を調整すべき生産要素―土地、労働(特に家族労働)―の供給の非弾力性が存する爲めでもある。生産期間の長期に涉ることも前の條件がある故にこそ價格變動の影響を大ならしめるが、更に農產物價格がその生産に必要な生產物の價格に對し時差を有することは特に農產物價格下落に際し騰貴の場合の利益以上の損失を農業に與へる。この時差も生産の非弾力性の諸條件の結果であらう。

一般的な價格變動と異つて個別商品の價格變動の原因は需要供給の狀態に基くものでありこの問題は第二章に於て論ぜられる。農產物の需要―特に食料としての―は非弾力的であり、従つてこの非弾力性は供給の變化と共に價格の變動を甚だしいものとし、この變動の程度は市場の廣さ―時間的にも空間的にも―と反比例するものである。(第一節)

供給の側面に於て見るならば(第二節)すでに一般